

LICENSED PRODUCT
3/Color
White
Magenta
Red
Yellow
Green
Cyan
Blue

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

神武前記
乙

朝鮮戒嚴
院君入闕
豐嶋之捷
宣戰大詔
成歡之捷
義勇團結之詔
清國宣戰
英皇局外中立勅
清政府各國公使照會
日韓盟約
平壤大捷
黃海大捷

洋学文庫
文庫8
J235
2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

神武前記乙



六月十六日京城特報 報知新聞

本月十三日海兵の當城を引揚げて仁川に向ふや同日午後六時を以て
我陸兵一千二百余人の勢を以て入京せし其重なる將校を謀部より
福島中佐水田中佐司令部司令官長官一戸中佐山崎中佐佐等の人々
之等入京しはれども工兵輜重兵等は一隊たりて後に入京しはれども
今日十六日迄一千二百余人の上りしを以て一昨夜より近き者あり
の大凡兩ありと拘りて嚴く非常な警戒の昨夜の如きは兵士一同
服鞋の揃ひて睡りし三湖及龍山ハ各一隊の兵士を
喚出し急変を例せしむるの際に直ちに格闘を加へしむるの
準備をふさぐの居たり

今日^{十六日}郵船七艘より我兵三千餘人仁川に安ん

じし其の較あり其果ては当地に上りてきや否や
未確ならず收り元津に我兵三中队上陸して
非常な警戒を以て居るなり

七月十三日我軍體代世保より出祭

七月十三日時事より

馬関七月廿七日午前
八時五十二分祭

去る十三日京城ノ皇宮福宮外に於て日韓兩兵ノ衝突
ありし時我騎兵二名即死歩兵二名傷死兵即死

十七名又傷六十餘名我大多公使歸延ノ依於
受け獲歸ノ兵ヲ率に大隈君ヲ導き正宮ノ入シト
スル時韓兵ハ國族ノ指揮ニ依り突如我兵ヲ目懸テ
奔脱ス我兵ハ之ニ意ニ接戦ス暫時韓兵忽散リ走ル

是日太院宮入宮執政ヲ托セラル

七月廿八日時事外

去二十九日豊島附近ニ於テ海戦アリ

清兵千五百ヲ撃セタル運送船一隻ヲ

高陞ト号ス英人所方船ニト云

沈没セシヲ清軍艦操江ヲ捕獲シ

靖遠ハ或ハ云清國ニ廣乙ハ牙山ニ

向テ遁ケタリ

八月二日同号外

馬関八月一日癸

清艦廣乙ハ淺瀬ニ來テ自焚ス員

皆陸地ニ逃去タリ独逸南水ノ覆セシノ

報

去廿五日清艦靖遠ノ敗走セシ際出合

ヒ独逸南水員ノ談話ニ依レハ同艦ハ士官

室ヲ撃破サレテ艦員十五名ノ即死アリ

是役清艦野砲十六門ヲハ捕ス我艦吉野
タリト浪速秋津洲ノ三隻也

七月廿七日京城癸

太院君ハ執政ニ海陸軍總指揮

宣ハナ

金宏集軍國機務局總裁ニ任ス
後員十七名皆用代官ニ

韓廷ハ二三日前牙山ノ清兵追放ノ委任狀

ヲ我大島公使ニ交附シタリ

韓廷ハ清國ニ對スル從來ノ關係ヲ總テテ

之ヲ京博駐劄ノ外國使臣ニ通告シタリ

金宏集領議政ニ任

地ヨリ前國ハ駿ヲ如國家一族皆遠惡

成敬島ニ配流處ニ入ル 別冊ニ記ス

王地潤氏廢セラル 此件誤傳

八月二日 宣戰ノ詔勅

天佑ヲ保全ト万世ニ享スル皇祚ヲ踐メル大日本
帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ清國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ百僚有司
ハ且ク朕カ意ヲ體シ陸上ニ海面ニ清國ニ對シテ

交戰ノ事ニ從セ以テ國家ノ目的ヲ達スルニ努力
スヘシ苟モ國際法ニ戾ラザル限リ各々權能ニ志シ

テ一切ノ手段ヲ尽スニ於テ必ス遺漏ナカラムコトヲ期
セヨ

惟フニ朕カ即位以來茲ニ二十有餘年文明ノ代ヲ平
和ノ治ニ求メ事ヲ外國ニ拂フルノ怒ヲテ不可ナク信

シ有司サシテ事ニ友邦ノ誼ヲ萬クスルニ努力セシ幸ニ
列國ノ交際ハ年々遠アラキ親密ヲ加フ何ソ料ラム

清國ノ朝鮮事件ニ於ケル我ニ對シテ著ニ鄰交ニ
戾リ信義ヲ失スルノ舉ニ出テムハ

朝鮮ハ帝國カ其故ニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就
カシメ允獨立ノ一國タリ而シテ清國ハ毎ニ自ラ長

鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ陰ニ陽ニ其内政ニ干涉シ其
内亂アルニ於テ口ヲ屬邦ノ挫折ニ藉キ兵ヲ長斜

ニ出シタリ朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ兵ヲ出シ
テ變ニ備ヘシメ更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ニ永遠ニ

免し治安ヲ將來ニ保タシメテ東洋全域ノ平和
ヲ維持セムト欲シ先ツ諸國ニ告ぐニ扱事ニ從
ハコトヲ以テシタニ諸國ハ翻テ我々ノ持柄ヲ設ケ
之ヲ拒ミタリ帝國ハ於是朝鮮ニ勸めん其ノ批政ヲ
肇革シ内ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義
ヲ全クセムコトヲ以テシタニ長鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタ
ルモ諸國ハ終始陰ニ居テ百方其ノ目的ヲ妨碍シ刺
辭ヲ左右ニ執リ時機ヲ緩ニシ以テ其ノ水陸ノ兵備ヲ
整ヘ一旦成ルヲ告ぐヤ直ニ其力ヲ以テ其ノ欲望ヲ
達セムトシ更ニ大兵ヲ集ルニホシ我艦ヲ韓海ニ要
移シ沿ト亡我ヲ極メタリ則チ諸國ノ計固ク明ニ
朝鮮國治安ノ責サシテ歸スル所アリテ帝國力
車先シテ之ヲ諸獨立國ノ列ニ伍セシメタル長鮮ノ地位
ハ之ヲ表示スルノ條約ト共ニ之ヲ蒙晦ニ付シ以テ帝國
ノ權利ニ益ヲ損傷シ以テ東洋ノ平和ヲ永ク損
保ナカラシムルニ存スルヤ疑フヘカラス其ノ爲メ不
ヲ執テ深ク其謀計ノ存スルヲ揣ニ其始メヨリ平和ヲ
犧牲トシテ其ノ非望ヲ遂ケムトスルモノト謂ハサルハカラス
既ニ茲ニ至ル朕平和ト相終始シテ以テ帝國ノ光榮ヲ
中外ニ宣揚スルニ專ナリト出モ亦公ニ戰ヲ宣セサルヲ得

サルヲ得サルナリ汝有元ノ忠實勇武ニ倚賴シ速ニ
平和ヲ永遠ニ支後シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセム
コトヲ期ス

御名 御璽

明治三十七年八月一日 各大臣副署

八月二日時事号外

八月二日午前七時十五分依世保奏

我陸軍ハ大勝利ヲ以テ成歎ノ支那

兵ヲ撃退シ三十日午前七時ヨリ牙山ニ

向ニ進ム

日清兩國ノ兵成歎ニ於テ始メテ接

戦ニ此好結果ヲ得タリ文明日進ノ

我帝國ノ海陸軍向ノ如ク敵ナシ

馬関発八月一日午後二時

朝鮮龍山、我軍隊牙山に向テ出發シタルハ

去月廿五日ナリ

再度ノ海戦ニ就キ一大快報ヲ傳フ英倫ヲ
確メタル上ハ直チニ讀者ニ急報スヘシ

八月三日午前九時四十分 釜山發
全十一時四十分 東京發

二十九日朝三時發ヲ開ク激戦五時
間ノ後我軍全勝ヲ得テ急ク欣歡
跃ノ歎息ヲ拔キタリ清兵二千八
百餘人ニシテ死傷五百餘名我軍ノ死
傷將校五名下士卒凡七十名

敵軍狼狽全ク多散ニテ洪州ノ方面

潰走セリ蓋シ群山附近ヲ朝鮮領

桑ハ横リナラシカ

分捕ハ軍旗數旗大砲四門其他

山ノ如シ

追撃シテ牙山ノ本據ヲ奪ヘリ

七月三十一日於七原 大鷲少將

去ル八月一日我北京代公使村北京ヲ引
揚テ帰航ノ途ニ上レリ

清國公使汪鳳藻今三日午前北分發稿
桑ノ汽車ヲ横濱ヘ引揚セル五ノ使船ヲ
帰國ノ旨

八月四日中央新聞より
舟山、漢將葉志超、再士成、兩名、敗軍
後跡、跡、不分、不明、ヨシ、不確
列國、要求、ヨリ、上海、ヲ、以テ、彌、局、外
中立地トナシタルヨシ

舟山沖海戦ノ實況

八月七日、時事
新報

去月廿五日午前七時、支那軍艦探江号
兵士ヲ載セタル運送船一艘、ヲ、獲、虜、シ、太、沽
ヲ、舟山、ニ、向テ、舟山、港、碇、泊、ノ、清、艦、濟、遠、座、乙、ノ
面、ヲ、之、ヲ、迎、エ、ニ、為、同、港、ヲ、出、テ、航、進、シ、豐、島、沖
ニ、三、ノ、イ、ザ、ル、嶋、也、ニ、於、テ、折、シ、モ、仁、川、ニ、向、テ、航、行、中、ル、我
軍、巡、野、浪、速、秋、津、洲、三、艦、ニ、出、會、ヒ、ク、我

軍艦、一、三、將、旗、ヲ、掲、ゲ、凡、ニ、彼、ノ、相、當、ノ、礼、式、ヲ
為、セ、ル、ニ、ナ、ラ、ス、戰、闘、ノ、准、備、ヲ、シ、我、ニ、向、テ、敵、意
ヲ、示、シ、タ、ル、海、面、狹、隘、ナル、故、ニ、我、三、艦、ハ、方、向、ヲ、南
西、ニ、轉、シ、沖、合、ニ、出、須、臾、ニ、テ、彼、我、ノ、距、高、相、接、近
ス、ニ、際、シ、彼、忽、チ、發、砲、ヲ、始、メ、我、艦、直、ニ、之、ニ、志、シ、テ
發、砲、ニ、激、戰、ス、凡、一、時、ニ、十、分、北、方、ヲ、追、テ、砲、撃、セ、シ、ニ
濟、遠、ハ、直、隸、海、灣、ニ、廣、シ、ハ、速、力、著、シ、減、シ、テ、東、東
海、岸、ニ、近、キ、淺、所、ニ、逃、走、セ、リ、其、間、又、忽、チ、沖、合、ニ、入、リ
二、艘、ノ、汽、船、航、進、シ、来、ル、ニ、達、フ、次、元、ニ、近、キ、見、シ、ハ
一、清、艦、探、江、ニ、テ、一、ハ、英、商、船、旗、ヲ、掲、ゲ、支、那

運兵船之ヲ既ニテ去野ハ濟遠ヲ追ヒ數日間追
撃ヲ試ミモ彼處所ニ走リヨクテ之ヲ追フ不_レ能_レ
引返セリ此間秋津沙ノハ既ニ操江ヲ捕獲シ談
牒檣頭ハ我軍飛龍ヲ離セリ秋津洲飛長信
是ヲ白ク敵飛降伏其飛長我飛ニ在リ談牒ハ我兵
之ヲ運轉シテ其兵器ハ相當ノ處置ヲセリ云々
是ヨリ先浪速ヲ以テ我軍兵ニ對シ空砲一發投錨ヲ
命ジ我司令官ヨリ談牒ヲ本隊ニ連レ行クヤ命
ヲ受ケタルヨリ人見大尉ハ我飛内ヲ取調ヘシニ我
長告之ニ談牒ハ清兵五百人餘ヲ乗込マセ武器ヲ積

載シ支那政府ニ送ルニ升山ニ航行中ナルヲ以テ又同
本飛ニ續キ來ヘキヤ問ヒタルニ飛長答ヘテ曰吾ハ助
ナク只我命令ノマニト即直ニ投錨セリヤ余ニ見
顧ム端飛ヲ送ニタルヲ答テ我飛信ニ志シテ端飛
ヲ送リ士官ヲ派シテ飛長ト對談セシタルニ飛長曰ク
支那軍_兵余ノ其飛ニ尾スルヲ許スニテ太沽ニ停
航スルヲ主張スト此時我飛内駭然又我ニ對シテ敵
意ヲ表シ飛長以下ハ支那兵ノ九月追ヲ受ルヲ知
浪速ヨリハ信ヲ以テ其船ヲ見捨ヨリ余亦彼又
端飛ヲ送ルト志ヘ我ヨリ彼ヲ端飛ニ來ルヘキヲ信

セニ彼等吾ハ許サレズ答テ因テ法兵益々船
長ヲ脅迫シ我命ヲ拒ムモノト認メ前橋ニ赤旗ヲ
掲ケ向付ニ信子ヲ以テ直ニモ船ヲ見捨テ命シ
愈之ヲ破壊スルニ決シ午後一時過ぎニ沈没
セシメタリ此時英人船長以下皆海中ニ飛入法兵
之ヲ見テ船長等ヲ射殺シタリ我軍艦ハ端艇
ヲ棄テテ船長以下運轉手操針手等ヲ救助セリ
此海戦我号ハ一人ノ員傷タリ飛舟亦異状ナシ
而シテ敵ノ二艦ハ大破壊ニ及ヘリ運兵船支那
陸軍將官二大隊長四中隊長十兵員千百

名野砲十門ヲ載セタリ操江ノ乗組員ハ船長
王永發以下八十二名ナリキ

詔勅

朕ハ祖宗ノ威靈ト臣民ノ協同トニ倚リ
我カ忠武ナル陸海軍ノ力ヲ用テ國ノ後
戚ト光榮トヲ全クセムコトヲ期ス
各地ノ臣民義勇兵ヲ團結スルヲ奉
ルハ其ノ忠良愛國ノ至情出ルヲ知
惟クニ國ニ常制アリ民ニ常業アリ非常
徵発ノ場合ヲ除クノ外臣民各々其ノ

常業ヲ勤ムコトヲ怠ラス内ニ益々生得
進メ以テ富強ノ源ヲ培フ朕ノ望ム所ナリ
義勇兵ノ如キハ現今其ノ必用ナキヲ認ム
各地方官朕カ旨ヲ稔シ示諭スル処アルヘシ
御名 御璽

明治二十七年八月七日 各大臣副署

成歡驛戰狀

八月十日 時
新報

明治二十七年七月廿五日 韓廷ハ韓外
務省辦ヲ遣シテ書ヲ我大島公使ニ致シ
牙山屯在ノ清兵ヲ撃退セラレニコトヲ請フ

於是大島旅團長ハ玆カ龍山ノ軍隊ヲ
率テ牙山方面ニ向テ進軍セリ 初一日三
里程ヲ進ミテ果川ニ露營シ次日ハ四里程
ヲ進ミテ水原ニ達シ次日ハ六里程ヲ行キテ
振威ニ到リ 次日ハ愈敵軍ニ迫リ 尤モ
益々歩武ヲ緩シ 行程ニ里七原ニ至ル爰ニ
我隊ヲ二分シ 一大部分ヲ直ニ牙山方面ニ向
テ進發シ以テ清兵ノ後ヲ衝ク 謀ヲナシ奉
軍ハ更ニ一里程ヲ進テ素砂場ニ駐シ
素砂場ハ成歡ノ清營ヲ距ル一里半

成敵ハ牙山街道ノ要所ニシテ牙山ヲ距ル
七里我軍隊ハ既ニ振敵ヨリ行程三里ヲ經
テ午前十時素砂場ニ到ルニ敵營ト相對シ
テ僅ニ六十メートルノ短距離ニアリ然レ共故ニ
控ヘテ開戦セシメス終日休息ヲ命ジタリ
明レハ七月二十九日前夜十二時一聲ノ銃ニ軍
裝ヲ整ヘ枚ヲ啣ツ鳴リテ静メテ清溪ノ前面
水田ノ間ヲ通ル一線ノ道路ヲ進行セリ小流ノ
架橋ニ至テ左右兩翼ノ兵ハ二時前ヨリテ
渡リ他モ三時頃續テ渡ラントスルヤ堤後ニ埋

伏ミタシ清兵五百余突然現ハレテ放火ヲ始メ
彈丸雨射頗ル急ニ攻撃セタリ我々軍隊ハ幸
不幸出且一方ハ銃聲ヲ携ヘサレ衛生隊ヲ率ヒ
一方ハ地理ニ熟セスシテ掩蔽物ヲ利用スルニ能
ハサルレカ少時ニシテ軍氣ヲ復シ志戦スル中ニ松崎
中隊長ハ彈丸雨飛ノ間ニ立テ進軍ノ号令ヲ
傳ヘ軍隊亦一步モ退カズ遂ニ呐喊シテ清兵ヲ
步兵力ニ三聯隊身三大隊長大尉正七位五等
相討直臣無本落士是役敵死傷ハ十一
追拂ヒタリ地戦僅ニ十五分間止共清兵死者
二十餘名中將校ノ服ヲ悉ケタモノ一タアリ

生擒者二名我兵死者六七名溺死者十數名
砲声止テ二時間餘午前六時ニ至テ我右翼本
隊ハ清兵ノ右翼前ニ高地ニ在リ先ツ砲兵隊
ヲ砲彈ヲ以テ敵軍ノ砲撃ヲ抑メテ一層ニ堡壘
ヲ毀テ次ニ榴霰彈ヲ放テ敵兵ヲ害シテ清軍
ノ砲兵隊モ之ニ応ジテ發砲セタル共ニ發彈多ク徒ニ
放彈ヲ飛タル過キスニテ我砲兵陣地ニ達スル一發モ
ナシ然レニ我砲兵ハ悉ク敵軍ノ前面若クハ上部ニテ
破砕セタルヲ以テ清軍到底守ルヘカラザルヲ知リ頼
坊々最高陣地ヲ棄テ西南ニ退却セリ是ヲ始メ

ニテ清兵ノ堡壘次第ニ破レ砲声全ク止ニテ悉ク
牙山方面ニ退却シタルハ七時三十分即チ開戦ヲ始メ
一時三十分間ヲ費シタリ清兵ノ死者百餘名又傷
者凡四百名ニテ我兵ノ負傷者僅ニ二十餘名ニ過ス
翌三十日我兵腰覽ヲ祭リ牙山ヲ指シテ進軍セリ
此地ハ清軍ノ根據地ニシテ今日ノ形勢ヨリ云ハハ一昨謂
背水陣ニハ死カザルニテ戰フナリト思ヒシニ我兵
ノ牙山ニ到リタル頃ハ既に彈丸數十萬發兵糧
六七百俵ヲ放棄セテ清兵悉ク洪州ヘ向テ潰走
シタリ

成敗に破レ升山ノ本拠ヲ奪ハレタリ又那ノ敗兵ハ洪州
ニ降テ近ヒ群山ヨリ佛祖ニ投テ本国ニ逃ケ帰ルナラ
ントノ事ナリトモ後章ニモ報道ニヨリハ彼等ハ海
岸ニ向ハスエテ洪州ヨリ大興洪州忠州等ノ内地ヲ
經テ元山津ノ方向ニ遁走セシモ兵器ハ大抵戦地ニ
捨テ去リタモト見ヘ一人ノ銃剣ヲ所持スルナク
今ヲ戰國カヲ失テ三ト五ト逃ケ行ク様ハ見ルモ
哀レナリト云

廣乙号^最丹期ノ飛次 後章新聞

七月廿五日、海戰ニ於テ支那軍艦廣乙ノ戰

場ヨリ遁走東ニ航シ濱岸ニ近キ淺瀬ニ乘揚ケ
タル當時ニテ追撃セタ我軍艦秋津洲ノ誤ノ帰
レル処ナカ今同月廿七日早朝、於テ我軍艦高千
穂及摩耶ヨリ瑞艇ヲ發シ該艇ヲ檢視セシタリニ
廣乙ハカリシ湾ノ西隣ナルハ湾内ノ淺瀬ニ破船レ
居レリ同艇ハ一等水雷砲艇ニシテ速力ナク七海里ニ
シテ十二珣ノ式ニ速射砲^{三門}六門速射砲四門
及機關砲數門ノ外水雷砲射口官四箇ヲ備ヘシ
カ火薬庫破裂ノ爲メ艇中ノ多クハ浸水セシナリ
之ヲ檢視スルニ由ナシト雖モ蓋我軍艦ヲ爲メ其ノ

要部ヲ撃破サレ周車狼狽遁走ノ結果終ニ淺
瀬ニ乘揚ケ保護ノ術ナク乗員ハ自ラ火薬庫
ニ放火シテ逃走セシ者歟或ハ要部ヲ砲撃セラレ
シ爲ニ起リタル火災テ火薬庫ヲ破損セシメリ
モノカ乃其ノ本部ハ多ク焼失シ又飛首アリ凡三
分ノ二ノ処中折シテ米水ニ没ス又機内上甲板ハ
鋼骨ヲ現ハシ其ノ十二珊砲ハ尚實用ニ堪ルカ如シ
右舷側砲ノ側ニ死屍累累トシテ機橋下ニ於テ司
令塔内ノ如クハ羅針盤信子旂等粉碎シテ慘
狀ヲ極メ中三個ノ立屍アリ蓋シ機長ナラシカ其他所々

ニ屍アリテ臭氣殊ニ甚シカリシ又下甲板ニ於テモ數
多ク屍アリヲ知モ浸水ノ爲メニ詳算スルヲ得ス
我軍艦ヨリ發セシ彈着ハ數ハ精確ヲ信スルニ足ル
リテ其ノ僅ニ水面上ニ出タル部分トモニ於テモ大砲
彈ヲ受タルノ跡十ヶ所ニ及ヒ此他小口徑速射砲彈
等ノ破壊力大ナルヲ見ル端使ハニ亦モテ噴レタル
ヲ以テ其ノ三度ハ陸岸ニ漂着シ居ンテ認メタル
清國宣戰ノ詔 八月一日北支那日、新報
朝鮮ハ二百餘年来中華ノ属邦ニシテ常に朝貢
ヲ絶タス是法外國ノ善ヲ誤ルハ処ナリ近時十數年
前ヨリ内亂屢起ニ際シ朕ハ其小弱ヲ憐ミ若シテ
援助シ京城ニ駐在官ヲ置テ以テ保護セシムルニ

至しり本年三月四日(清曆)更に復内れ起り國王ハ之
ヲ鎮壓セントシテ再ヒ中華ノ後勒ヲ求メタル故ニ朕ハ
李鴻章ニ命シテ軍隊ヲ派遣セシメ其所ハ着スルニ及テ
叛徒ハ直ニ退散セリ然レモ倭人ハ毫モ理由ナシテ兵ヲ
京城ニ派遣シ遙々増シテ一萬人ヲ超ユルニ至ラシメ其勢
ヲ以テ自方朝鮮ノ京城ニ國王ニ迫リテ政府ノ組織ヲ
変更セシメントス倭人ノ為スルハ實ニ理ノ以テ論スヘカラザル
ナリ抑モ朕ハ昔ニ中華ノ属邦ヲ保護スレトモ敢テ
其内政ニ干渉シタルコトナシ而シテ朝鮮ト日本ノ條約ハ
一國ト一國ノ間ニ於テスルカ如ク締結シタルモノニ因ト
國トノ間ニ於テ大勢派遣シ其威カヲ以テ脅迫シ政府ノ
組織ヲ変更セシムルカ如キ理由アルヘキ否ナケルハ諸
外國共ニ皆其ノ所為ヲ咎難シ出兵ノ何故ナルヲ知能ハス
日本ハ道理ニ従フヲ欲セス朝鮮ニ於テ為スヘキコトハ撤兵
ノ後穩便ニシテ商賈セシト勸ムルニ從ハサルニナラス却テ
勢ヲ振テ計ラスニテ戰意ヲ示シ派遣ノ兵數ヲ増加セリ
為シニ朝鮮人ト共ニ中華國民ノ警備一方ヲス朕ハ彼等ヲ
保護スル為メ更ニ軍勢ヲ増スルニ何リ因ラシ其未
タ舟山ニ達セザル海岸ニ於テ倭艦若干艘突然華船僑
ナリ顯ハレ運送船ヲ沈メタリ斯ノ日本ハ既ニ條約ヲ

破リ國際ニ法ヲ蔑如シ今ハ既ニ甚キ不足不向不務
ヲナシ諸外國ノ誹議ヲモ顧ミザルカ故ニ倭人ト共ニ許スヘ
カラザルヲ及ヒ朕カ終極仁意ニ理ヲ專ラシタルヲリ
滿天下ニ知ラシメ李鴻章ニ命シテ倭人追放ノ諸軍ヲ
催促セシメタルハ諸軍ノ勇兵引續キ朝鮮ニ進發シ以テ
其人民ノ疾苦ヲ救フヘシ朕ハ又滿洲ノ諸將海岸
諸省ノ總督巡撫及ヒ諸軍ノ提督ニ令シテ出師
準備ヲ為サシメ倭人若シ欲テ港ニ入ルハ時ハ其軍
艦ヲ破砕スヘシト命シタル朕ハ諸將軍諸提督等
カ能ク城守ヲ帶シテ苟モ懈怠ノ罪ヲ得ザランヲ期ス

原文

七月初一日奉上海朝鮮為我大清藩屏二百餘年
歲修朝貢為中外所共知近十數年該國時多内
乱朝廷字小為壞屢次派兵前往戡定並派員紮
該國都城隨時保護本年四月間朝鮮又有土匪
變乱該國王諸兵援勤情詞迫切當即諭令李
鴻章撥兵赴援南抵瓦山匪徒星散乃倭人無故添
兵突入漢城嗣又增兵萬餘迫使朝鮮更改國政
種種要挾難以理喻我朝綏撫藩服其國內政事
向令自理日本子朝鮮立約係屬其國更無以重

夫欺壓強令革政之理各國公論皆以日本師出無名
不合情理而令撤兵和平高麗乃竟悍然不顧迄無
成說及更陸續添兵朝鮮百姓及中國高麗民日加驚
擾是以添兵前往保護詎行至中途突有倭船多
隻乘我不備在牙山口外海面開砲事大擊傷我運船
變作情形殊非意料所及設國不遵條約不守公法任
意鴟張專行談計籌備自彼公論昭然用特布告
天下俾曉然於朝廷幹理此事實已仁至義盡而倭人
諭盟聲譽無理已極勢難再予姑容着李鴻章
嚴飭派出各軍迅速勦進厚集雄師陸續進奏以
拯韓民於塗炭並著沿江沿岸各將軍督撫及統
兵大臣整飭戎行遇有倭人輪船駛入各口即行迎頭
痛擊悉數殲除毋得稍有退縮致干罪戾將此
通諭知之欽此

英國局外中立之詔

朕今幸幸幸各國和平和順境之立於此平和
之永遠保持也朕力極力保持之使不致於
下且支那帝國日本帝國之間之不幸之文
戰之狀態是見之皇朝之兩國之共朕友邦之
之使交激力不朕力臣民之往來居住之貿易之

屬財產之所有之且朕之權利特典之受也
朕功之地平和之幸福之保持也之故
茲之前記之兩國之對之嚴密中立之守之決
之秘密顧問之議之經之地詔勅之發之爾
親愛之臣民之皇朝之之立之嚴守之
即朕力即位三十三年及之十四年之發布之
之條規之之示之依之知
臣民取歸之條規

- 一 英國臣民之其國內之否之問之
之許可之之文戰國之之海陸軍役之
加之之及英國臣民之之問之英國內之
在之之行為之導之
二 英國臣民之其國內之之海陸軍
役之加之之目的之之英國之
之及英國臣民之之英國內之
在之之行為之導之
三 虛妄之之偽之之導之
海陸軍役之加之之
四 船舶之所有者若之之理者之之

許可ナクテ事情ヲ知ラテ次ニ示ス処ノ人ヲ載セ又ハ載セ
ヲ約シタルモノ

才一 英國臣民タルモノ英國内ニ在リトモトモ
女皇ノ許可ナクシテ文戰國ノ海陸軍役ニ加ハリシ
モノ

才二 英國臣民タルモノ女皇ノ許可ナクシテ文戰
國ノ海陸軍役ニ加ハリ目的ヲ以テ英國ヲ立去
ルモノ

才三 雇妾又ハ作偽ヲ以テ誘導セラレ文戰國
ノ海陸軍役ニ加ハルカ為メ乗船スルモノ

五 英國内ニ在リトモニテ女皇ノ許可ナクシテ次ノ
行為ヲナシタルモノ

才一 軍事ニ使用スルコトヲ知リ又ハ知ラサルハカラ
地位ニアルモノニシテ文戰國ノタメニ船舶ヲ構造シ
及構造スルヲ約シタルモノ

才二 戦事ニ使用スルコトヲ知リ又ハ知ラサルハカラ
地位ニ

在リトモニテ文戰國ノ船舶ヲタメニ或行為ヲナシタル
才三 前項ノ船舶ノタメニ軍需ヲ上ヘタルモノ及出賣
セシメタルモノ

六 海戰以前ニ於テ船舶ヲ構造又ハ軍需ノ契約ヲ為
スモノハ次ノ要件ニ従フ時ハ刑罰ヲ免ヘシ

才一 契約ヲ為セシコトヲ國務大臣ニ具申シ其命令ニ
従テ履行スヘシ

才二 保証ヲ提供シテ履行セシ若シ國務大臣ノ命
令アルトキハ文戰國ノ終ニ迄女皇ノ許可ナキ内ハ履行
ヲ為サルコト

七 英國内ニ在リトモニテ女皇ノ許可ナクシテ文戰國
ノ船舶ノ定数ヲ増加シ其他戰船用ノタメニ加工スルモノ

以上數項ニ掲ヘタル犯者ヲ禁錮シ處シ情ニ依リテハ
苦役ニ改メシムコトアルヘシ而シテ犯罪ノ具ナル船舶ハ

政府ニテ差押ヘ及沒收スルコトアルヘシ

朕ハ更ニ朕カ愛スル処ノ臣民及朕カ保護ノ下ニ在
ル總テノ人民ニ諭ス朕ト平和ヲ保ツ文戰國ノ主權

者臣民及土地ニ對シテ須ラク中立ノ義務ヲ守ルヘク

且文戰國ニ對シ其作戰ノ權利ヲ尊重セサルヘカラス

是朕及祖宗ノ共ニ尊重スル処ノモノナリ

朕ハ更ニ朕カ愛スル処ノ臣民及朕カ保護ノ下ニ在
ル總テノ人民ニ告グ汝等若シ朕カ勅諭及朕ノ冀望
ヲ蔑視シ外國君主ニ文戰ノ場合ニ於ケル局外中立
君主ノ臣民タルノ義務ヲ怠リ或ハ國際公法ニ悞リ

元行為ナリ特ニ此當且現安ニ成立ニ名討鎭破
若シク破ラントシ又ハ國際公法又ハ近代ノ國際慣例ニ
於テ戰時禁制ニ属スル物品及ヒ役負軍人通信
武器火藥軍用物品ヲ運送シ又戰國ノ一方ノ用ニ
供シタルキハ總テノ違反者供ニ船舶及物品ハ當然
係争者ノ為ニ捕獲セラルヘク國際公法カ此行為ニ加フ
ルノ制裁ヲ受ケサルヘカラス
故ニ朕カ臣民及ヒ供カ保護ノ下ニ在ル人民ニ告ク汝
等前言ヲ遵奉セシテ敢テ違反ヲ止ムルアラハ自カラ
其危險ヲ犯シ自ラ罪惡ニ陷ルヲ志ルヘカラス而シテ
朕ハ此ノ如キ被獲者若シクハ被刑者ヲ保護スル
ナキニナラス此等ノ行為ハ大ニ朕ノ逆隣ニ觸ルモ
ナルコトヲ知ルヘシ 此外米國和蘭葡萄牙及
下標等皆局外中立ヲ布告セリ

八月十四日俄皇保奏電報

我艦隊ハ本月十日早於威海衛ニ

在敵ノ艦隊ヲ攻撃スル目的ヲ以テ

同所ニ進航シ砲臺ヲ砲撃セシテ

港内ニ彼艦隊アラヌ依テ砲撃ヲ止

同日午六時引揚ケテ我艦

無事

朝鮮新内閣

總理大臣	金宏集
外務大臣	金允植
內務大臣	閔泳建
度支大臣	魚允中
軍務大臣	李景遠
法務大臣	尹用九
學務大臣	朴定陽
農商務大臣	源成泳
工務大臣	徐成淳
宮内大臣	李載晃

清政府各國公使照會

大清欽命總理各國事務王大臣

照會事前因朝鮮金羅道有亂民滋事該國王備文請援經北洋大臣奏明我

朝廷因該國前兩次變亂經中國為之勘定故特派兵前往不入漢城直赴全城一帶進剿該

匪聞風潰散我軍撫卹難民方謀凱撤詎日本派兵赴(對)北各助勦定則徑入漢城今

距要害嗣又屢次添兵至萬餘不止竟脅迫朝鮮不從中國藩服開列多款逼令該國王一

遵行查朝鮮為中國屬邦歷有年所天下皆知使國主

各貴國立約時均經聲明有案日本強令不從於中國體制有礙已失向來睦誼至比鄰

之國勸其整理政務原屬善意但只能好言勸勉豈有以重兵欺壓逼勒強行之

理此非但中國不忍坐視即各國政府亦皆不以為是

英國政府及俄國政府先後屢飭駐紮該國大臣向英外

務部阻並經

英國外務大臣勸其將兵撤出漢城云中國兵分紮兩處和平商辦朝鮮事務此議甚為公允乃該國悍然不顧反添兵朝鮮人民又

中國在彼商民日加驚擾中國念各國共敦和好之意斷不肯遽予開衅致生

事端查該商船有傷後雖添兵前往保護亦距漢城尚遠不至于日本兵相遇路衅何意

該國忽逞陰謀竟於六月二十三日在牙山海面突遭兵輪多隻先行開砲傷我運船並殺我沈

挂英旗英國高陞輪船一隻此則衅由彼啓公論難容中國忍為念邦交再難曲為遷就不

得不另籌善法決意辦法想各國政府聞此變異之事亦莫不相共駭詫

以為責有專歸矣今特將日本情事連法首先開衅情事始末備文照會

貴署大臣轉達貴國政府查照須至照會者

光緒二十九年陸月貳拾玖日

奉十三日大本營より廣島に進ソラン

明治廿七年九月八日
海軍大臣 西郷從道
陸軍大臣 大山 岩

今日廣島より大本營に進められ
天皇陛下明十三日東京御発車

即日割丸を通

九月十三日

午前七時

御出門

同十五分

新橋西着車

午後六時十分

名古屋御着

御泊

同市般若寺院

十四日

午前九時十分

名古屋御発車

午後四時三十分

神戸御着

御泊

神戸御用邸

十五日

午前九時三十分

神戸御発車

午後六時四十分

廣島御着

大本營着御

今收得朝鮮國駐劄大島特命全權公使同國
外務大臣金久植ノ間ニ記名調印セシ兩國盟
約ハ左

大日本
大朝鮮 兩國盟約

大日本 日本曆明治三十七年七月廿九日
大朝鮮 朝鮮曆同國五百三十三年六月廿
三日

一 於テ朝鮮國政府より清兵撤退一節ヲ以テ朝鮮
國在京城駐在日本特命全權公使ニ委託シテ代辦セ
シタル以來兩國政府ハ清國ニ對シ既ニ攻守相助
ルノ位地ニ立テリ就テハ其事實ハ明著ニ併セテ
兩國事ヲ共ニスル目的ヲ達セシカメ下ニ記名セシ
兩國大臣ハ各々全權委任ヲ奉ヒテ訂約シテ條款
左ニ開列ス

第一條 此盟約ハ清兵ヲ朝鮮國ノ境外ニ撤
退セシ朝鮮國ノ獨立自主ヲ以テ鞏固ニシ且朝鮮
國ノ利益ヲ増進スルヲ以テ目的トス

第二條 日本國ハ清國ニ對シ攻守ノ戰爭ニ
依リ朝鮮國ハ日兵ノ進退及其糧食準備ノ

タノ及フ大使更ラテヘシ
第三條 此盟約ハ清國ニ對シ平和條約ノ

成ルヲ待テ廢罷スヘシ

此カ為メ兩國全權大臣記名調印シ以テ憑信ヲ昭ニス

大日本國明治二十七年八月二十六日

大朝鮮國閔國五百三年七月二十六日

特命全權公使 大島圭介
外務大臣 金允植

勅使 西園寺公望

八月二十日 朝鮮國王殿下及后妃

世子大院君等ニ 謁見ス

日清同戰以來我在外軍隊ノ費消

一日ノ總計金額

九二十五萬圓ニ達スト云

九月十二日
時事新報

九月十七日

時事新報号外

我軍大勝
平壤陷落

十五日以來我師團平壤ヲ圍激

戰の後大勝利ヲ得今朝未明

全ク平壤ヲ果取リ敵ノ死傷極

ク多シ我軍將校以下死傷凡

三百名

十六日午前八時中我師團
長發電

我師團ハ糧食運輸の大困難ニ

拘ラレ各道より平壤ニ向テ前進

昨日より均しく城の四面を

圍メ激烈なる戰鬪の後大勝

利を得今未明を以て今之を
略取敵の大將左衛門以下死傷捕
虜兵器并穀の我手ニ落りたる極て
多敵敵の兵力も二萬と稱せしむ
来二三群を以て我哨兵線を逃れ
去り他も皆死傷なる捕虜あり
我將校以下死傷三百人此大勝利
天皇陛下の威靈と將校以下の
忠勤に依り

十六日中和より野津中將参

昨日平壤攻撃の際来院せし死傷

者將校十名下士以下二百六十名入院

後死亡二名

十六日午前九時此本田
病院長参

勅語

九月十七日午前十一時
廣安参

朕本營ヲ進んニ當り我軍大ニ

平壤ニ勝つノ報ニ接シ深ク將校

下士等ノ勤勞ヲ察シ速ニ特異

ノ知蹟ヲ奏セシヲ喜如ス

平壤戦況

伏蘇大佐の元山津支隊ハ
成川より

立見少將の朝寧支隊ハ
夢田店より

大嶋少将の混成旅團ハ
義州街道ニ

野津中将の本隊ハ
大同江を渡り右岸に沿ひ

共ニ平壤に向ひ十五日四面より合圍
攻撃す

大嶋少将の被下捕虜ハ敵の大部分が平壤と
其右に希望して其部が平橋里に在り大同江
を隔て架け

本隊ハ渡河の爲め遅れ十九日の攻撃を
敵の騎兵百餘を倒し

大嶋少将の旅團ハ少将校即死六名負傷十二名
下士以下死傷三百名以上あり彈藥の欠
乏を依り止むるは其攻撃を中止せしむ

各面の義勇漸次好交を呈し午前八時に
全平壤を略す

敵將大寶貴以下を生捕し其兵士米穀
の残存と其所の極多くを山縣大將に
報知

捕虜男の清兵ハ六百名に達す

伏撃を爲す支隊ハ將校即死三名負傷四
名下士以下死傷百四十名

分取品中金銀環の目方三十五匁金箱四十
箱銀六萬四千匁あり其報知

其後捕虜板算を以て金五萬六千三百圓
銀五萬九千五百圓 雜銀十三萬八千圓
合計九拾五萬五千五百圓

九月十九日夕刻時事新報号外
ハ上海發して本社發して依款あり通電は
特電夫の如し

市ハ上海の新國紙は其外を發し清政府
の公報として其の如く記載す

影ハ清國の陸軍を搭載し運送
船數隻ハ艦隊に護送されて鴨綠江

岸に達し都合好く援兵を上陸せしめ

より其共護衛の清艦隊ハ日本艦隊

非等、攻め受け

巡洋艦

致远

二千三百ト

日

超勇

千三百五十ト

同

揚威

其他一艦を撃沈せしむ

北洋水師提督丁汝昌及び近頃同水

師副提督を任せしめんと云獨逸人ハ

子ツケニハ北海戦に於て戦死せり

我々清政府の公報に云果ては北洋艦の
損失は戦後遺り大なるものなり我々艦隊を
破壊の達せしめ勝利は蓋し非等のものなり

平壤に於ける我々の死傷者

我兵の死亡

士官

八人

百五十四人

又死傷者ハ

將校

二十六人

士卒

三百七十八人

敵の死亡

約二千人餘 負傷者ハ凡

死者十二人餘

又捕虜

五百十三人

その他傷者

法兵八十人

九月廿日同外

在釜山古川大橋より大日本軍へ達し

殺ハれた

本日の午後四時十分仁川榮法谷兵站官

より反の報を今受領せり

去ん十七日支那艦隊十一艘と我々艦

隊九隻黄海の北邊海洋島附近

ヲ開戦シ我艦隊大勝利敵艦三隻ヲ
沈メ一隻ヲ燒夷セタリ

又同僚領事館ヨリ着シタル報道ハ如左
只今大同江ヨリ入港セル最上川丸ノ前
セハ報告ニ依レハ

去ル十七日午後一時我艦隊ハ海洋山島
北東三十里ニ於テ支那艦隊十二隻水雷
二隻ニ出合彼ヨリ撃出シ我軍大勝利
敵艦三隻ヲ沈メ一隻ハ自カラ燒キタリ我
艦皆無事一陸下ノ敵機ニ合ニ逼リ万
一戦

大本營

在金山古川大佐

只今大本營ニ如左揭示セラル

去ル十六日午後五時本艦隊亦一遊撃

艦隊集城西京等十二艦ハ海洋山島ヲ

經テ大孤口沖ニ向テ進行セシ十七日午前

十時四十五分敵ノ艦隊定遠鎮遠

靖遠致遠未遠經遠威遠揚威

超勇廣甲廣乙平遠ノ十二艦及ヒ

水雷艇六艘ヲ発見セリ午後零時

四十五分激戦中我軍艦西京數彈ヲ

受ケ船機ヲ破壊セラレシヲ以テ候機ヲ

用ヒ進行自由ナラセシメ同午後三時

十五分敵ノ艦隊ヲ追拔セル際彼等水雷

二隻ヲ撃射シタルモ其効ヲ奏セザリシ我西京

從根松地ニ針路ヲ進メ十八日午前一時に
歸着セリ本艦列外ニ出ル時敵艦ニ砲廢艦
ナリニヤニ見受ケタリテ他ノ我艦隊ハ無
シ為ニワリ歟ニ今十八日最上川ハ大同江
沖ニテ松島ニ出合共信ヲ持來セリ
「昨日海戰ハ我大勝利ナリ其處ニ
行ク」又昨日投錨地ニ到着セリ
遊撃艦隊及ハ八重山ハ直ニ應援ヲ為
ルニ發航セリ各艦隊ノ分ニテ原因ハ
陸軍ニ復送シ又三ノ應援スルヲ為メニ

軍艦隊ノ戰闘中火災ノ為メ列外ニ
出テ鎮火ノ後本隊ノ所在ヲ見失ヒ今十
八日午時歸着セリ同艦死傷二十人
負傷三十四人

本艦^{西京} 負傷八十二人 中艦ニ至リテ彈
丸三十冊 半四箇 他二十一冊 以下數個

九月十八日午後四時三十分

海軍軍令部長
樺山 次良 紀

大本營

本日大和艦にテ左ノ報告了

九月二十日
廣く発

朕我カ聯合艦隊ノ黄海ニ奮戦

大勝ヲ得タルヲ聞キ其威力歎海ヲ

制壓スルヲ費ハ深ク將校下士卒

ノ勤勞ヲ案シ茲ニ特殊勲功ヲ

奏スルヲ嘉ス

大島公使ノ報道 九月二十日号外

嶋村海軍大尉ノ報告ニ云

海洋島附近ニ於テ海戦ハ數ノ激

烈ナリテ十七日午後一時始メ日午後

五時ニ終リ我軍大勝利を博ス

敵艦 靖遠 來遠 超勇

揚威の四艦ハ沈没

定遠 經遠 平遠の三艦ハ

燒亡其他の諸艦ハ數回ニ島キ

損害ヲ受けて西ノ向ニ逃去セリ

我軍の損傷

北叡 松島 赤城の三艦ハ

砲丸ヲ受ケルモ甚キ損害ナシ

此役戦死者赤城艦長始め將

校九名下士卒三十名員傷者

百六十名

昨日伊東聯合機隊司令長官より其節に
連日報告あり

陸軍ヲ獲送シ十二日仁川沖ニ達シ十四日第二遊
撃軍ト八重山ト仁川沖ニ留シ其他諸艦ヲ率
ヒテ出奔シ十五日大同江ニ達シ第三遊撃軍
ト水雷艇若津天城ヲ鉄島マテ進メテ陸軍
ノ應援ヲ為サシ十六日日本隊ト第一遊撃軍
天城西京丸都合十二艘ヲ率イテ十七日朝海
洋島ヲ經テ空軍省太孤山沖ニ至リニ敵艦隊十
四艘ト水雷艇六艘トニ出合ヒ午後零時四十分
より午後五時迄マテ數回激戦ヲナシ終ニ未遠
揚威超勇ノ三艘踏遠又ハ致遠ノ中一被都
合四艘ヲ破壊沈没セシメ其他ニモ大損害ヲ受
タル者多シ現ニ定遠經遠ノ如キモ火災起リ頗
混雜ノ被アルコト見タリ其内日没ニ近キ敵艦隊ハ
阜城縣ノ方向ニ遁テ去ルノ状アリ多ク故ニ艦
隊ニ之ヲ廢ル為メ凡テ之ト並行ノ航路ヲ取リテ進
ミシニ夜中敵ノ水雷艇ニ備ル為メ餘程ノ距離ヲ

隔テ進ミシ故ニ敵ノ所在ヲ見失ヘリ茲レに翌朝
天明ニ至ラハ必之ヲ見出し得ルナラント期シテ廟
島ノ方向ニ進ミシニ天明ニ至ルモ一被サモ見出サス故ニ
敵ハ或ハ元ノ地ニ引返シタルヤモ計ラスト思ヒ昨
日ノ戦地ニ引返シタルニ違ニ三艘ノ煙ヲ認メシモ何ニカ
逃レ去ラ其所在ヲ失ヘリ依テ前日大災ノ為ニ淺瀬ニ
乗揚リ見捨テアリシ揚威ヲ破壊シ一ト先當地ニ返
リタリ

西京丸ハ軍令ニ部長乗組屋ニ危險ニ陥リシモ幸ニ
無事ニラ本隊ヨリ失ニ帰リタリ此役我艦隊ニハ

沈没セシモノナシ但多少ノ損害ヲ受ケタルハ勿論ナリ
其中松島最モ甚キモ職務ニ少シモ故障ナシ我カ

艦ノ死傷ハ左ノ如シ

戦死者 將校十名 下士卒六十九名

夏陽者艦隊ヲ通シテ將校下士卒ヲ合セテ凡
百六十名内松島赤城ハ敵最モ多シ此役
以敵赤城最モ苦戦ス以敵ハ本隊ト分高シ苦
戦ノ末一ト先當地ニ歸リ負傷者ヲ運送收捕シ
更ニ海門ト共ニ本艦ヲ索ルル為メ出奔セリト云

十七日海戦ニ死者

赤城艦長	坂本大尉	八市太	四十一
橋立分隊長	高杉大尉	義馬	三十二
松島同	志摩大尉	清直	三十七
橋立砲術長	瀬口大尉	實四郎	三十
秋津洲分隊長	永田大尉	康平	廿八
比叡軍医長	三宅大軍医	貞造	三十九
同主計長	石塚大主計	鐸	太廿八
松島分隊長	伊東少尉	瑞嘉記	廿七
吉野同	津野少尉	重行	廿七
比叡乗組	村越軍医	十代吉	三十七

九月十一日

皇后陛下御沙汰

今般我海軍黃海ニ於て大勝を
得て、皇后陛下、同食を將
校以下奮戦、功を奏せしむ

深、御感賞あらせしむ

平壤大勝、陛下、陸軍、將校以下
中感賞の御沙汰も之と同じ

去る二十一日、旅順官待從中村中佐、山縣陸軍司
令官及野津桂ノ兩師團長へ、又、旅順官待從齊藤海
軍少佐、伊東聯合隊司令官及相浦中將、坪井少將、
御慰問ノ為、勅使、シテ、美意、達ハサレ、且、目錄、ヲ、以テ、御酒
其他、ヲ、御下賜、アラマシタ、旨、其、勅、(特報、アリ、)

平壤攻戦ノ戦果

死者	士官	八名
負傷	士官	百五十八名
	下士	百二十二名
	下士	百廿七名

敵兵

死者	九百二十一人
負傷	九百一十一名
捕虜	十四名
捕獲及負傷者	八十二名

捕獲米穀	二千七百十石
精米	八十石

其他雜穀 合六百石

九月廿九日大本營

陸軍大臣

補第二軍司令部官 大山 巖

兼任 陸軍大臣 西御從道

(特旨以陸軍中將現役ヲ命セラル)

九月廿四日平壤祭

平壤の役ニ捕りし大砲三十六門

内 名ヲ記四門 山砲二十四門

外 敵の安州ニ遺し置る野砲四門

合計ニ捕砲 四十門あり

大本營

平壤攻撃ノ死傷者

大將少將ノ混成旅團ノ 俱本道ヲ進
死傷 三十三名

將校 即死 六名
負傷 十六名

士下卒 即死 一百十名
負傷 二百五十名
不明 十三名

朝鮮ヲ進ミ立見少將ノ率ニ
支隊ハ

將校 即死 無
負傷 三名

下士卒 即死 九名
負傷 四十五名

元山口ヲ進ミ佐藤大佐ノ隊ハ

將校 即死 二名
負傷 五名
下士卒 即死 三十一名
負傷 八十七名
不明 十九名

野津師團長ノ本隊ハ

將校

即死

一名無

見習士官

即死

一名無

下士卒

即死

四名

諸隊惣計

即死

八名

見習士官

即死

一名

下士卒即死

百五十四名

負傷

四百十名

不明

三十三名

九月廿五日伏見保奏
黃海海戰員傷者

負傷

百〇三名

内重傷

二十五名

松島艦

稍快方

同

河村軍医大監

輕傷

安間少尉

同

扶桑艦

内崎少尉

嚴島艦

司

松沢少技監

負傷下士卒

九十九名

松島

四十名

燒傷二十九名
入院後死之三名

比叡

十六名

内燒傷一名

赤城

九名

其他諸艦

三十九名

右員傷者、多クハ破烈丸等ノ碎片ニ撃レ死
モノニシテ一名ニ數個下ノ員傷アリ然レ入院後
ノ経過善良ナハ今後死スルモノハ多クモ
十名ニ出サルヘシ又各艦ニ残レル者ハ極メテ
輕傷ニシテ入院治療ヲ要セサルモノナリ

海軍吉軍医供監

西郷海軍大臣宛

九月廿五、釜山發

韓民我兵站官ヲ殺ス

本東近傍ニ蜂起シタル東學黨偵察ノ為
派遣セラレタル竹内少尉及兵卒一名ハ暴徒
ノ襲撃ヲ蒙リ竹内少尉ハ咽喉ヲ斬レテ
死亡シ兵卒ハ暴徒ニ捕ハレテ両手ノ指ヲ悉ク
断タレタル幸ニシテ台封ニ逃レ歸リタリ

平壤ノ戦ニ負傷セシハ左ノ如シ但何モ微傷ノ
由

陸軍少將

大島

少將

同歩兵中佐

木下

中佐

同中尉

松浦

直一

同少尉

石森

市房

同

桂

武一

去ハレ一日松村少尉ハ伊東聯合艦隊司令
長官ニ使ヒテ釜山島ニ来リタルニ

天皇陛下ヨリ御召アリテ少尉ヨリ親シク戦
況ヲ奏上シ奉リタル由其要領ナリトテ昨日東
京日ニ新聞ノ外ニ見ヘタル如ク

九月廿五日、時事新報

初、清艦十四隻ハ其水雷艇六隻ト共ニ大孤
山港ニ繫泊シ居タル我軍艦偵察中ニ發
見シ清艦ハ直ニ列ヲビテ進ミ来リ我艦ハ四
千メートルノ距離ニ於テ發砲シタル

我艦ハ遠距離ノ為ニ命中ヲ誤ラシコトヲ危フミ
三千メートルノ距離マテ進ミ始テ應砲ス

交戦四五時我艦ハ始終隊形ヲ変セス清
艦ハ遂ニ用レ立テ来速先ツ沈没シテ後部
ヨリ水ニ入り前部ハ昂立レテ半空ニ向ヘテ遠
超勇艦ヲ沈没シ士卒多ク帆柱ニ縋リ歸
還活ヲ求ム其状悲慘

我艦ノ敵ヲ撃沈スル皆砲彈ヲ用ヒ水雷ニ依
テサリシ能ク二重底ノ來速ヲ撃沈シタル是
レ子ハソシ以奉稱有ノ奇功ナレハシ

比敵速カクシテ遺憾ヲ免セス且列ノ最後ニ
在リシヲ以テ多ク敵彈ヲ受ケ遂ニ大災ノ為ニ

列外に出たり

西京ハ艦機ヲ撃破シ列外ニ出ントモ猛烈鎮
遠定遠ニ艦ヲ突入ス其距離僅ニ七八十
メートル而シテ清艦ハ之ヲ衝突スルモト謀議シタ
リヤ意外ニモ開展シテ西京ヲ避ケ西京ノ為ニ路ヲ
啓ケタリ同時ニ清艦ハ奥形水雷ニ同ヲ放チ先
モ距離近キニ過テ西京ノ艦底深ク水中ヲ透リ抜
ケ西京ハ為ニ事ナキヲ得タリ

列外ヲ出タル比敵ハ一旦根拠地ニ来リ死傷者ヲ
運送船ニ移シ一医官ヲモ載セス直ニ引返シテ我國
地ニ向ケタルモ最早間ニ合ハサリシハ乗組ノ士卒カ無
限ノ遺憾トスル所ナリシ

松山島ハ旗艦トシテ前頭ニ立テテ以テ砲彈ヲ受ル
最モ多ク為ニ被傷ヲ生シ列外ニ出カハカラサレテ以テ
伊東司令長官及ニ聯合艦隊幕僚ハ橋立ニ轉乘
シ之ヲ旗艦トシテ我艦隊ハ浮足立タル清艦ト併行
ニ進行シ之ヲ尾撃シタルモ日没ニ月星ノ水雷ニ備
フニ為ニ注意シテ距離ヲ保チタルヲ敵艦ノ所在ヲ見
失ク天明廟島ニ達シ頻リニ在索ヲ尽シタルモ見當
ラス乃チ昨日ノ戦闘地ニ歸リ揚威ノ要業セシテ既ニ

人ナキヲ視魚形水雷ヲ以テ之ヲ撃沈シタリ

清艦定遠経遠平遠ハ火災ニ罹リテ狼狽ヲ極メ

我國線内ニ在ル間ハ孰レモ鎮火セザリシ

米國軍艦一隻ハ此海戦ヲ目撃シ居タルと思ハレ

平壤戦況

九月廿四日奎山發

混成旅團ハ敵軍牽制ノ目的ニテ数日間戦ヲ
挑ム敵ハ大同江ノ左岸ニ半永久ノ築城ヲ能ク
之ヲ守リ我々街中ニ陷リテ勢ヲ地方面ニ集ム十五日
午前四時開戦朝鮮軍支隊ハボタンダイニ元山隊ハ北
ヲ師團ハ南ヲ進ミ激戦ハ九時間大破ニ萬全午
後強風大雨敵遂ニ自旗ヲ収メ其全タタハ逃走
(此ニ窮ニ遂死スルモノ多シ)捕虜千ニ近ク敵ノ
死傷三千人城北ノ將左寶貴ハ死セリ我軍十六日
午前一時入城セリ

平壤の攻勢ハ近所殆ど大戦多クナリテ我々
兩國の年々實ニ是レ此一戦ヲありと云ヒ不可
ナキナリ抑平壤の城ノミヤ要害の地ニ據リテ築
ル戦果上極テ有利ナキ取テあるのみナリ成敗の

敗後、最も慎重に力を尽し、大兵の峻要に加ふる人
為の防備を以て、之を陥落せんと決して
容易の業とあらず、之を守り、軍兵は、軍中
精銳とせしめ、奉天府の馬隊を加ふる、敵の敗兵
を以て、これハ、後兵を對し、下らん、韓人の三夫は、同子
將、不、其れハ、兵數、實、二、萬、と、起、ち、る、と、云、ふ、と、成、思、は
れ、て、銳、利、と、て、破、れ、ル、ヲ、新、式、の、山、火、火、砲、と、銳、ハ、モ、
せ、れ、の、連、發、及、ム、ス、ベ、シ、セ、ン、サ、等、に、さ、れ、ハ、沒、利、の、一、度、ハ、之、を
又、明、固、形、式、の、兵、と、以、て、主、と、耻、ハ、不、あ、く、我、の、却、て、及
ハ、ス、不、あ、り、殊、と、至、安、と、の、韓、人、ハ、悉、く、敵、の、味、方、と、稱、せ
へ、き、者、あ、れ、ハ、清、兵、の、方、ハ、善、事、便、利、と、て、平、壤、の、敵、軍
ハ、一、物、久、く、ま、は、し、而、し、我、軍、を、懸、軍、長、驅、り、遠、く
敵、地、ハ、入、り、殊、と、氣、使、の、不、順、一、度、ハ、九、十、度、取、ハ、四、五、度、と、
際、糧、食、と、て、ハ、泰、粟、の、如、き、糧、食、の、外、あ、く、非、常、の、勞
を、以、て、要、害、と、稱、し、清、軍、の、逸、と、當、る、と、困、難、想、ふ、て、
若、し、我、軍、を、捕、ま、り、於、て、多、少、日、子、と、糧、食、あ、ら、ハ、忍、ぶ、ハ
攻、城、の、苦、も、少、か、ん、と、決、際、我、作、戦、上、に、於、て、之、を、許、さ、
彼、の、五、師、團、長、の、名、未、後、一、あ、ら、う、て、直、ち、混、成、旅、團
を、發、し、之、を、入、て、も、知、し、一、是、が、先、混、成、旅、團、ハ、敵、敵
凱、旋、の、日、々、直、ち、平、壤、攻、城、と、し、向、い、臨、津、江、開、城、府

の、占、領、一、戸、少、依、の、出、發、及、い、兵、站、部、の、配、置、等、後、の、
準備、と、取、扱、り、即、ち、五、師、團、の、作、戦、計、畫、ハ、兵、を、四、道
と、進、ち、更、に、一、支、隊、を、師、團、の、本、隊、と、派、出、さ、し、あ、り、即
ち、山、支、隊、ハ、十三、日、松、橋、と、是、一、十、日、順、安、と、出、て、十五、日
直、ち、平、壤、と、向、い、報、寧、支、隊、ハ、十三、日、大同、江、と、沿、ち、麦
田、洞、と、出、り、十四、日、大地、境、洞、と、進、ち、十五、日、直、ち、平、壤、と、
向、い、師、團、ハ、二、團、と、初、め、一、月、山、下、の、緑、沙、浦、を、
渡、ち、一、と、氷、津、浦、を、渡、り、江、西、と、な、り、て、左、側、隊、と、
一、離、山、路、と、り、左、右、并、ん、て、平、壤、と、向、い、混、成、旅、團、ハ、十
二、日、大同、江、の、南、二、里、の、地、を、水、濟、橋、を、來、り、敵、軍、卒、制
の、目、的、を、以、て、挑、戦、は、兵、を、一、偏、と、地、方、面、に、備、へ、し、あ、
り、方、界、と、い、ふ、人、と、せ、り、之、を、要、と、し、五、師、團、の、目、的、を、五、道、并
と、進、ち、十五、日、拂、曉、と、直、ち、平、壤、攻、城、と、始、む、計
畫、と、し、あ、り、

清軍の防備

城北、大同、江、の、流、を、臨、み、凡、し、て、こ、ろ、く、從、軍、中、ハ、若、し、是、れ
清、軍、の、堡、塁、と、し、て、彼、の、金、城、鐵、壁、と、恃、み、し、ん、牡、丹
其、之、前、面、堡、塁、の、後、に、低、城、を、築、き、ク、ル、ヲ、野、砲、三
門、と、壯、不、し、一、前、面、堡、塁、と、ハ、カ、ウ、リ、ン、グ、連、發、銃、を、備
へ、其、他、の、堡、塁、と、ハ、或、ハ、又、防、禦、と、く、或、ハ、側、面、防、禦、と、さ

者よりありし各々連発の小銃を奮へ又中砲山砲を
彼へともあり外敵の防壁や何れも破るに足るなり
牡丹を文祿の役より西行長の敗北より地より敵の假
城を急斜面をふり一壁壁高き五丈に餘り破る
完備して掩蔽物堅固法人の兵士は三美一古未稀か上
山より利率及元と支隊の攻勢を二方面より六箇の砲
臺あり野砲各一個を掘附師團の攻勢面より南より
城壁を隔てライソンの堡臺ありとも後より數個の幕
幕地あり奥山少佐の向ひハ城の南面數個の幕臺
散列せし下より各道戰酣ふりの付突敵天を焦
せし奥より城方面より又大山島混成旅團の面前より
大同江に沿って二個の假城と二個の堡臺あり遠く
半里の外亦二個の堡臺あり小邱の上松林の間に砲臺
蓋し前哨堡臺より我北進軍を拒せんともあり
あつて之を要するより防壁の堅牢固密なりと成敵
升山と日と同ふて語るべし成敵の野砲臺あり
敗將葉志超も亦兵軍の中よりて是れ些成敵の耻
を雪んてこそ期せしものなり江を渡りて左岸の
假城より直隸省馬步營の統領左安貴ハ城に
守り並に其の兩將ハ盛宣懷軍を率て統領馬玉

貴ハ葉志超ハ江の左岸に陣し衛徐貴ハ馬附軍
を指揮し南方の城外に陣し其他徐揚等將將を
概ね城外にありしと赤地と白く將校の姓名を記す
軍記の高く城牆を翻しとも敵多かりし外ハ天
津水雷隊の一隊も亦城内にありしと云

我軍の攻圍部署

大島少將ハ部下の混成旅團を率ひ臨津開城を
往り冀州にも中和を過り義州街を好むて十二日
早くも水浸橋を達し中央部隊を冀州より轉して
大方より急め水津に拠りては十四日沙川近傍
に露宿元山の一隊ハ十三日順安より十四日臨津
城を占り里へ地ハ北漢山の後大島少將の旅團
ハ其任實に敵を牽制するにありし諸軍と先立ち
敵と交戦合戦を始め十五日朔寧元山師團
の三軍は背後より突撃するの計畫ありて亂山紅土
より西方の一面より敵の退路を塞ぎの積りあり
惟より進めし兵は攻勢の戦術より我ハ優勢
あり堅牢態あり城を破るに平壤に攻守せしむハ我
軍の得策と非れはとより先大島少佐の一隊ハ混成旅團と
聯絡を運せしむ半角の下の流を断りて城の南方より

向いし、更に我軍の奇襲を果させられ、一方を獲て三面より攻撃し、敵軍白旗を樹け、あつたは敵軍は走つた外復たつとも不能なりとあり

明治二十九年元山支隊の血戦

朝鮮支隊の敵軍は近きハ熱河旭日の嶺と東林の上とを以て改して恰も江のたふさへ混成旅団の奮戦もあつた右方ハ元山隊の北漢山上より砲口を開きて敵軍を急襲せしあり敵は左方より攻撃を蒙り又他を敵の砲より受ふ五百メートルの短距離より達せし迄背後より敵の進軍もを知りて支隊長立見少將直ちに兵を展開し丘上より伏し少急射を敵の第三堡塁に注がしむ彈丸雨注敵兵死すし支隊は往々しとて此時早彼時遅し第一第二の堡塁を急ぎ我隊に向て側面射撃を試み各々をふ十三連発銃を使用せしむられハ其勢猛烈容易にたふさへし少將は己むるは兵を分ちて二とあり第二十一聯隊ハ二大隊山より伏し敵の右堡塁に向かへし第一聯隊ハ一大隊長馬田少佐を以て中堅に當らしめ之を少將以てかく牡丹江の地を以て是國に我兵進撃の路を塞ぐ者なり是れ急ぎ計て陥らしめんとす

即副官桂大尉を以て左翼第五中隊長小倉大尉同中隊長長本中尉を指揮し第一第二の堡塁を急襲し入せしむ敵陣を恃んで敢てぬい先登兵の敵に銃口を接せしむる時漸く是を以て防戦しハ其脈兵少く我銃の兵に當るも其多しハ銃剣の刃を以て突き殺され瞬時にして仆る者多し餘人の多きハ及ば他を皆逃せし一隊軍一隊第一堡塁を占領し時午前十時半此戦桂副官役を傷け小倉大尉本陣中尉何れも重傷を蒙る先朝鮮隊の砲兵亦中隊ハ敵に隔る八百メートルの丘上より敵射を布き頻に榴散弾を發して第三堡塁に向へし雷雷少佐を援け敵亦應戦甚力むるは我榴散弾を畏怖せし補隊伍を乱せしむる機に乗じて丘より伏しの一隊を躍て敵營に突入し難く第三堡塁を陥れしむ時ハ八時元山支隊の運動ありしとあり十三の順安縣に達せし時一隊の展望兵を以て敵兵の有無を偵察せしむる清兵ハ三十名四圍より躍りて我兵を目標に乱射し馬を倒ししむる騎兵ハ徒歩長銃を拔て立つて其の敵を掃ひつ、苦戦の真最中支隊の部隊列を以て直ちに丘上より急襲し難く討掃の死地に陥るしむ

騎兵を救いし吸安を清軍兵站支部のあり知りて
北から軍吏一名士官一名兵卒二名を捕縛し翌十四日
安を發して平壤に向ひ捕を去る一甲の地を渡りし
十五日を以て城と対峙しわ漢山の山上に砲を引上
左方より歩兵を以て大砲千五百ノートの地を敵の左
側を砲撃し砲撃を始むる時午前五時よりわ漢山と
砲撃との間水田渺茫として中一糸の義勇隊の連を
あるのみ我軍十八聯隊より一大隊の敵軍を去る千
ノートの間を於て義勇隊を急進して敵軍を追ひ
吶喊一声天地を撼し人々大砲の敵軍を占領し
いゝと前後より一ノ二ノ三の堡壘も没落し一ノ二
の堡壘も戦ひたて潰れし午前九時我軍悉く城外
の堡壘を果取りし今八時より唯牡丹臺上の假城
のみ城に於て兵を部署し山口を依りて牡丹臺に向
ハシテ四少隊を以て城後の方地に進み元
山支隊長佐藤大佐を以て一ノ二ノ三大隊を督し
一ノ五堡壘の背後より突進を行て城後より一ノ三
面より城内の兵を攻撃せしむる牡丹臺の堡壘
固より容易に拔く可し是より先我軍は中隊及び
元山隊砲兵一大隊の北方の城壁を破砕せんとせし

歩兵苦戦の状を以て並ち一ノ四の城壁を以て山口少隊の一
隊を援けて牡丹臺の假城を攻撃せしむる牡丹臺
は元山より敵兵の砲火も榴散弾の力も殺傷し是より
支隊も退却しし將士退くも敵を援けしむる牡丹臺
は歩兵三面より蟻集し、射撃も急ぐ牡丹臺上の敵を
掃く佐藤大佐は牡丹臺を陥るも又進んで玄武門に
突進しし玄武門は牡丹臺の眼下あり敵は進軍
を便されし泥土を以て門扉を固めしむる敵は近
可らば三度突進し漸く之を陥れ更に進て城郭上
降りし敵は砲火の如雨より多数の兵士を殺ししむる
牡丹臺は敵は進軍しし我兵少く躊躇の多あり兎角
牡丹臺の劇戦のため我軍兵士は疲弊甚しく城内
の砲声も絶えしむる牡丹臺の二の地より我兵も退
休しし独り敵兵を以て城門を攻撃せしむる牡丹臺を
破砕し四柱の元より中隊と後軍とを以て牡丹臺を
城壁も堅牢より我軍は之を破壊ししむる牡丹臺を
より午後二時朝鮮元山の支隊も全く休戦ししむる
牡丹臺

中央部隊の戦況

中央部隊師團は十五日午前零時沙川を進発

山川河海を以て日漸く昇り、前面に田野を隔て、
敵軍の我進撃を候つる所を我軍の陣を敵軍と
相対峙せし山上に布き、サイフンの堡塁を向て突破し
敵軍之を意し、彈丸の我陣地に及ぶるもの如く、此の
當り（即ち二所隊より三大隊より中隊）は山を下り、米煙の
間を潜り、敵軍を向て進み、敵軍の百餘の軍門を
破り、我軍の陣の向を其一文を以て進み、歩兵を
之を知らず、山上より我軍の兵は必定に平野の向を潜進
せし我歩兵を躊躇するの目的あり、思ひ、歩兵
と共に力を盡せ、砲口を待し、騎兵を腹撃せし、歩
兵は故て敵軍の近き進み、歩兵を候り、米煙の中を
躍り、歩兵の大半を討ち、七八騎を生擒し、後捕
虜の物、歩兵の依り、城の西方馬歩兵營の傍、大將左
實貴、戦死せしを以て、士氣沮喪し、部下の戦兵馬隊は
亦て逃走し、少時の後、敵軍三四十回、サイフン堡
塁の東方より、小川を渡りて、逃出られ、今は即ち敗走の逃走
も、之を知り、之を以て、同く米煙より狙撃せし、歩兵は
僅に一騎逃れて、城を指して、急ぐと、足へ、一歩、次へ、三十
餘騎は、進進し、お共、大同江の方向に走り、此地は、山
が依り、及び、城外の敵を、掃ひ、火を、敵軍の、近傍の、家屋に

混成旅團の苦戦

混成旅團は主として敵を其方面より引付け、露土各
道の手塚を合撃せしむるを以て、之を以て、今令之を
知り、兵を分ちて、隊を、敵軍の、陣地、に、あり、故て、敵軍
は、現に、亦、各、道、の、軍、を、失、ん、で、可、ら、ず、を、以、て、九月十二日
豫定の通り、水溝橋に、翌十三日、已に、敵軍、を、始、め、翌
日、も、同く、砲撃、を、試み、られ、と、高、率、制、の、目的、を、以、て、石、湖、亭
柯帝店等、を、微、弱、し、一、支、隊、を、以、り、而、て、此地、を、率、制
の、動作、の、十、分、の、目的、を、達、せ、し、敵、軍、は、我、中央、部、隊、の
進、撃、を、五、里、以、内、に、達、せ、し、迄、探、知、し、れ、ば、之、を、以、て、知、り、今
而、て、敵、軍、の、進、撃、を、支、隊、及、び、元、山、支、隊、の、進、軍、を、知、り、ハ
中央、部、隊、を、知、り、し、早、く、も、兵、を、以、て、之、を、防、ぐ、の
目的、を、以、り、之、を、要、し、し、率、率、軍、を、以、り、若、し、其、軍、兵、を、以、り
若、し、と、欲、し、し、若、し、其、困、難、は、容、易、な、り、若、し、者、を、以、り
若、し、其、任、務、を、以、り、復、還、は、憶、ふ、ら、ず、ハ、戦、史、上、多

各々の戦闘も悉く休止せしむ散兵退却の命を傳へて
又方より退却せしむ時十二時半頃迄に何故に退却
旅團の新共戦士遣馬せしやハ前既記に不ふ
我地他は因をある者あり他ふ一我破兵の効少く
一事を之語を換れハ我破兵の陣地より退くべき地
ありし中故を以て退く後方より我破兵の砲丸ハ
千四百米突の地を達せしむも當て敵軍に五の砲丸
我兵ハ我破兵を以てしむて退れし砲丸を我破兵
縦列に及いしと云破軍堡寨の攻殺ハ大砲に依る非
ハハ効果ありし少く或敵軍銃を集めし破軍に
清軍白旗を樹つ

卑怯ある清軍ハ我破軍元山支隊の北方より攻殺し
又少休し一隊の兵を率めて半南山の下流を以て街徐
妻の寺より居る城の東方より堡寨を隔れ火を以て放
て攻殺しし中今ハ兵卒殆ど死傷逃走し又防禦の
術を以てしむに白旗を玄武門内の城廓に
懸しし時四時頃多し即ち見し將二隊の兵を率て玄
武門を進入城廓に江に沿てたゞ一個の小城門あり
子於て談判を始りし五言決通せし意を解し困
も桂副官の筆談に依り敵軍のあり処に今や驟雨

沛然加ふ日將を傾くとも兵を點檢し降伏の準備
をある甚固難ふれを明報を待てし云あり城門
を以てし今更に從ふれし談判の地は江に臨み壁に
沿ひ壁に群れし清兵千餘の勢を以て對撃せしむ
塵をせし火を叩きあれし入少將の意をヤ率
け人桂副官に附きし一小隊の兵を以てし談判を續中の
自ら兵を率めて退き牡丹を以てし而して桂副官に約
せし時唯又見人ありし以てし退き牡丹を以てし何
人を知ん城一更に清軍後退の準備をあるの勢
を以てし同一かんしハ

清兵の脱走

清兵の約をせしむと我軍に之を知ら彼等ハ白旗を執
し一時我の攻撃を中止せしむ時我軍一團を漢へ後退
を以てししむ時果ありし退きし一度降を清兵に
殺傷あり我軍に大度あり將校諸士の死ありしやあり
一方ハ師ふた例の一隊を難山街に出入八縣隊を義
街路に進めて清兵の退きを以て一夜の戦闘を以てし
果せし哉午後八時頃或ハ群を以て城門を出或ハ城
越り潛行し難山及び義州の方向に逃走を始めしハ我
攻圍兵ハ直に之を追撃し難山方向の師團兵ハ丘より射

我軍を加へては兵士に至ては其のつとめられ六面圍を仰て之に
接一方の血路を開くは丘上丘下の砲火連發其銀河の
如く觀山一帶の原野は閃々其妻に妻をとりて云許り而て之に
銃声砲火に依り敵の所在を察し暗射するも其れは我兵の死
傷をもあふりしは清兵は我陣を畏れ或は同志を殺傷し倒
れしものみても其數三百十餘人傷剣を蒙りしもの數何れを如
らんと同時に義勇街路でも砲声起り又山支隊の砲火亦八
聯隊の大小砲銃を數回注ぎ二百餘名を射殺ししもの予々
聖戦に参り戦死を果ししは死屍路に堆積し傷口は急激
を洗はれて薄紅色を帯ひ鮮血雨水に混れて路の枯草を
染山野悉く紅く夫は慘憺人として思はれ我軍にせしめ

西軍の死傷及び捕虜

我軍中死傷の最多ありハ大分が物の混成旅團にして左營
堡壘の攻撃に際し一時七十餘名死傷を生じ右營は百餘名
多き及び之に次ぐハ亦八聯隊にして砲臺支隊及び中央守隊
の如き僅に數名の戦没者ありしに返り總計の死傷者ハ之を
計算するの違ひは五概五百餘名をこへしなり其に清兵の死
者ハ二百名を餘りし傷亡は二百餘名を越えしもの數は之を
天數を知らずし捕虜の語に依りては死傷の總數は二千金名
に左營以下將校の戦没せしもの數は多しし捕虜ハ十六日

午前の計算より四百十名を餘りしもの數は之を傳へて其
もの死傷は少くも六百名をこへしもの數は之を傳へて其
いしもの掃蕩の中は埋もれ或は軍の下に匿れ以て我兵の
捕縛せられしもの戦後一兵卒を語つて曰十六日午後城外
の兵隊は古來傳の清兵の逃げたは取て押へんとし其
るに家中を捜索せしもの數は之を傳へて其の死傷は
引返さへしもの死傷は之を傳へて其の死傷は之を傳へて其
走りしを死せしもの死傷は之を傳へて其の死傷は之を傳へて其
服を脱ぎしもの死傷は之を傳へて其の死傷は之を傳へて其
一人の死傷は之を傳へて其の死傷は之を傳へて其

清兵我野戦病院ヲ犯す

清兵の我野戦病院ヲ犯すは其の業は彼等ハ兵士
とを以て罪惡を行ふの免許を得しもの信を以て故に
領内に在りし敵地を在りし助物を掠の婦女を辱しむるを兵
士の特權とせしもの業は其の時清兵は之を犯ししもの數は之を
あはれしもの死傷は之を傳へて其の死傷は之を傳へて其
さるは彼等降伏を約ししもの夜未十字旗の翻てしもの野戦
病院に襲撃し病室を圍入し自かく防ぐのみ力なき患者は
向ひ亂暴を藉る加へしもの一事は之を傳へて其の死傷は之を傳へて其
阿弗利加の土著を征伐ししもの同一の戦法を用ひしもの

を待さるへし

以下 後冊

詔勅 重復

朕は祖宗の威靈と臣民の協同とに依り我々忠誠を
陸海軍の力を以て國の後威と光榮とを全く
せんとす期を

各地の臣民と我々勇兵と團結せしむる事あるは其
忠良愛國の至情と出づるを知る惟よ國と帝
制あり民と常業あり非常徴発の場合を除く
外臣民各々其常業を勤むるを思はしめ内
益と生殖を進め以て富強の源を培ふ侯の望
む所あり義勇兵の智は現今其必要なきを
認む各地方官侯々皆々仰示諭せしめ知あるへし

御名 御番玉

明治廿七年八月七日 (各大臣副署)

